

授業コーディネータより

今回の催しは、いわゆる研究会や記念シンポジウムではありません。

この秋から、本学部が始めた、新しい取り組みである授業科目「世界のキャンパスから」の一回分を外部の方々にも公開する、「公開授業」という位置付けです。ですので、履修中の本学学生に限らず、どなたでも事前予約なしに参加が可能です。

大まかな授業内容は以下の通りです。

第一部

台湾大学で呉密察氏の下で中国映画史を研究し、現在、日本大学文理学部で中国語および中国文化を教えている、三澤真美恵氏による、「太陽花學運」に至る台湾の歴史的背景のレクチャー。三澤氏には、このあとも、コメンテーターとして参加戴きます。

コーディネータである大黒による、呉密察氏へのインタビュー。基本的には、インターネット時代において、政治参加はどのようなかたちが望ましいのか？ また、その際、学問は政治にどのように関わるべきなのか？ を中心に話を伺えればと思っています。

第二部

第一部を踏まえるかたちで、本学部の専任教員である須田努氏と清原聖子氏を
交え、政治参加における「暴力」の問題や「インターネット」の問題について、
議論を深められればと考えています。須田努氏の専門は幕末維新期の「民衆暴力」
と「社会文化」、清原聖子氏の専門はインターネット選挙運動の国際比較研究と、
アメリカの政治過程におけるインターネットの役割、です。

ただ時間が限られていますので、授業を円滑に進めるために事前に、呉密察氏
が作成されたハンドアウト（中国語原文および日本語訳）を配布します。当日、
配布用のハードコピーも用意しますが、できれば、事前にダウンロードして印刷
したものをご持参ください。

1. 1956年、私は台湾南西部に位置する嘉南平原の北門という名の田舎の農村に生まれました。嘉南平原は台湾で最も農業生産力のある穀倉地帯と呼ばれていましたが、北門は海に面した非常に土地のやせた集落でした。今の表現で言えば人口流出の深刻な「過疎」の村と言えます。この地の人口流出現象は私が子どもの頃からずっと続いており、今では小学校の廃校を検討せざるを得ない程度になっています（一年生から六年生まで全校生徒合わせておよそ60人しかいません）。
2. このような田舎の農村で生まれ育ったため、教科書には嘉南平原は豊かだと記述されているのに自分が目にしている実際の状況は全く違うことを小さいころから感じ取り、教科書に疑念を持つようになりました。
3. 私の生まれた家はそんな田舎の農村の中では強いて言えば「やや裕福」な家庭と言えましたが、経済的に余裕があったわけではなく、単に比較的多くの土地を持っただけです。また私の母親の実家が非常に貧しい家庭だったため、小さいころから実際の生活の中で貧富の問題を観察し、社会的弱者への理解や思いやりも持つようになりました。
4. 私は長男の長男（長孫と言います）で、小さいころは利口で良く言うことも聞く子どもだったようでとても可愛いがられました。故郷では皆に大事にされて子供時代を過ごせたと言えるでしょう。
5. 15歳（1971年）になると、家を離れて都市部である台南で高級中学[高校]（台南一中）に通うことになりました。当時はちょうど世界的な石油危機が起き、台湾の農村経済は大きな打撃を受け、我が家の家計も苦しくなりました。それからは、たとえ生活を維持できないほど困難な状況ではなくとも、基本的には収入に見合った支出を心がけるようになりました。
6. 高校から大学に進学する際、高校時代の恩師の影響で歴史に興味を持ったことや先輩の進めもあって、国立台湾大学の歴史学部を第一志望としましたが、当初は歴史学とは何かをよく分っていなかったと思いますし、また将来何の「歴史学者」になりたいのかも考えていませんでした（実のところそれは農村出身の当時の私にとっては実に難しい問題でした）。ただ、私は小さいころから読書の好きな子供でした（正確に言えば、活字好きだったというべきでしょ

う)。活字であれば何でも読みました。我が家では大学に進学した人はこれまでにいなかった（私は村で二人目、一族の中では初めての大学進学者です）、当然、大学とは何を勉強するところか分っていませんでした。そんなことから、家族もとにかく私を進学させられれば良いという考えでした。

7. 18歳（1874年）で台湾大学文学部に合格しました。これは我が一族や私の故郷にとっては、昔でいえば「状元[科挙の首席合格者]」が出たようなことで、ものすごい大事件だったのです。しかし、私にとっては「苦悶」の始まりだったのです。

8. 南部の田舎の若者が台北に上京したわけですから、当然生活になじめないことが様々ありました。しかし、その中で最も深刻だったのは「構造的な文化的差別」と言える問題を実感したことです。

9. 小学生の頃、学校は「国語（北京語）普及」に努めていました。生徒に母語である台湾語の使用を禁止し、授業も国語（北京語）で行われていましたが、それは単なる学校の規則（校則）としか思っていませんでした。普段の社会生活では当たり前のように台湾語を使っていました。しかし、台北に来て大学に入ってから、国語（北京語）とは単なるコミュニケーションツールを意味するのではなく、様々な文化的要素を含みかつ一種の文化的価値観を反映していると痛感しました。つまり、国語（北京語）は上等で台湾語は下等なものである、国語で伝えられる内容（中国と関係する事）は上等で台湾語で伝えられる内容（台湾と関係する事）は劣るものだという考えです。そこで私はようやく、小中学校の教科書の内容につねに違和感を覚えていた理由に気づきました。教科書には台湾に関する内容がない上に、ある種台湾を見下す文化的価値観を植え付けるものだったからです。

10. 台北に上京、台湾大学に入学、更には歴史学を専攻（当時の歴史学部で学ぶ内容はすべて中国の歴史で、台湾の歴史はほとんどありませんでした）した事それぞれが、私に厳しい文化的挫折感を抱かせることとなりました。国語を話せば南部の田舎の訛りが出してしまう台湾人である私は、これまで経験したことのないアイデンティティの危機に直面しました。

11. 私は、文化的挫折感とアイデンティティの危機を沢山本を読むことで克服しようとしてきました。しかし私の資質不足からなのか、或いは当時の台湾の書籍があまりに乏しかったためか、すぐには困難からの出口を見つけることはできませんでした。そこで私は「台湾を探す」旅にでることにしました。この旅とは、実際にバックパックを背負ってあちこちを旅しましたし（特にこれま

で行ったことのない台湾の隅々を回りました)、また大学の図書館で台湾の歴史に関する本を探して読むという旅でもありました。幸いなことに、台湾大学の図書館の書庫の片隅にほぼ整理もされず積み上げられたままの日本植民地時代の書籍を見つけました。意外にもこれらの本が台湾の歴史についての記述が一番充実していたのです。私はこれらの本の中に台湾を見つけました。十数年来私を育ててくれた土地、実際の生活に根ざした文化を見つけたのです。私はようやく気持ちが落ち着きました。そして、私は4年間の大学生活をもっばらこうした台湾に関する書籍を読むことで過ごし、自然と台湾史を学び、ひいては台湾史学者の道を歩むことになったのです。

12. 我ながら自分は比較的幸運だったと思います。なぜなら私は自分が一番好きな方法(活字を読む)で人生の難題を克服する方法を見つけ出せたからです。台北に上京してきた南部出身の友人たちも、彼らなりの方法でアイデンティティの問題に向き合っていました。直接或いは間接的に当時の台湾民主化運動に加わった友人も少なくありません(1970年代、国民党政権は外交上の敗北を補うために、国内では制限付ながら国会の改選[台湾選出枠を設けた]を進めました)。1980年代になると、台湾の民主化運動はより多くの台湾本土の要素を求めるようになり、私の台湾史の知識は彼らから度々必要とされました。

13. 私の台湾史研究の根底には「現実的な要求(アイデンティティ)」があり、歴史を通じて「なぜ現在の有様になったのか」を理解したいと考えていました。そのため、単なる「古いものを愛する歴史学者」で終わることは納得できず、海外留学を決めたのも自然の流れと言えます。台湾の歴史と密接に関係しているのは日本です。台湾の歴史は日本植民地時代の後非常に大きな転換を迎えました。台湾の歴史を理解する上で日本の要素を無視することはできません。ですから私はどうしても日本に留学して、日本の近代史への理解を通じてさらに広い視野で台湾の歴史を理解したいと考えました。また、当時の私は国民党の特務機関や独裁統治に耐えられなくなっており、海外に行って息苦しさから解放されたいという気持ちもありました。

1. 1980年代、台湾の民主化運動はある程度の規模に達し、社会の重要な動きとなりました（1970年代に当初植民地時代の台湾抗日運動史を研究していた若林正文教授も80年代になると現代台湾の民主化運動を観察・研究するようになりました）。「本土（歴史・文化）」が台湾の民主化運動を支える重要な栄養分であり、このような時代の要請の下、私も様々なペンネームで「党外雑誌 [国民党に批判的な雑誌]」に台湾史に関する記事を書くようになりました。当然、私の書いた台湾史に関する記事はこれまでのような国民党のプロパガンダ的教義（教科書）ではなく、史料の実証研究に基づく新鮮な内容だったため好評を博しました。

2. 1984年、ついに日本に留学に来ることができました。情報が制限され政治的に民主的でない台湾から日本に留学に来た当時は、まさに籠から飛び出した小鳥のようであり、その喜びは言葉では言い尽くせませんでした。日本留学期間は様々な面で私の人生の黄金時代といえます。日本の色々な面が私にとって全く新しい刺激であり、また私もこの新天地で全力で探求し吸収しようと一生懸命でした。今でも日本留学時代を振り返るとわくわくするものです。

3. 図書館や書店は素晴らしい本にあふれ、まるで知識の宝の山のようなようでした。日本留学の4年間は、私の研究生生活における黄金時代として今でも忘れられない思い出となっています。

4. 日本留学期間中は、学術研究の面で多くことを学んだ以外に、実際に情報が豊富で自由な東京に身を置くことで毎日多くの刺激を受けました。特に日本社会の状況を見ながら台湾の状況を改めて考える機会となりました（日本にいて自然と、比較する機会を与えられ、よりクリアに台湾の問題を考えることにつながりました）。そこで、日本にきて間もなく、私は台湾の雑誌に「日本通信」というコラムを定期的に執筆するようになりました（寄稿したのは主に『当代』という、1980年代半ばに私たち学術界・文化界の友人たちが創刊した、主に外国の新しい思想を紹介する人文思想の雑誌。日本の『現代思想』のようなものと言えます）。私が書いた最初のコラムは家永三郎教科書裁判に関する記事だったことを覚えています。台湾と日本の間には民主化・自由化の面で時差がありましたから、私の「日本通信」のコラムは台湾の社会に当時としては進歩的な概念（例えば国民教育権）を紹介する役割を担うものとなりました。後に「日本通信」をまとめて本を出版するに至りました（『日本観察』1992年）。

5. 日本に来て間もなく、1986年にフィリピンではマルコス政権崩壊に至るコラソン・アキノ氏のピープルパワー革命が起きました。フィリピンの民衆が集

結し街頭でデモ活動を行う様子が連日テレビで報道され、私は日本にいながらにしてフィリピンの人々の変化を求める極度なまでの熱気を感じました。特に当時日本には出稼ぎに来ているフィリピンの女性が多かったため、日本のテレビ局は東京でしばしば彼女たちに街頭インタビューをしてフィリピンの政治に対する意見を聞いていました。フィリピンの女性達はとても正直に直接カメラに向かって臆することなく自分の考えを述べていました。その姿は、当時まだ特務機関の監視の影を意識していた台湾の留学生にとってとても大きな衝撃でした。ああ！これこそが「民主（国民の意見の表明）」、これこそが「恐怖のない自由」なんだ！と。当時の日本に出稼ぎに来ていたフィリピン人女性達の姿は、台湾から来た留学生にとって実にリアルな政治の授業となったのです！「民主」「自由」とは本来、教科書に書かれた「綺麗なもの」だけではないのです！

6. 台湾では大学の新学期は8月から始まります。そのため私は1889年6月に日本での留学生生活を終え、台湾に帰る準備をしていました。しかしちょうどその時期に中国で天安門事件が起き、世界を驚かせました。当時東京にいた私たちも影響を受け、7月中旬に中国政府への抗議デモに参加しました（当時の日本での反応は控えめなもので、大学のキャンパス内での抗議デモにとどまるものでした）。その後帰国し8月の新学期を迎える準備に取り掛かりました。私が留学している数年の間に、台湾国内の民主化運動は盛り上がりを見せ、台湾大学でも学校側の学生管理規定（例えば、学生による刊行物は学校側の事前の検閲が必要でした）に抗議する学生が出てきて、またキャンパス内の蒋介石の銅像の撤去を求める動きもありました。当時の国民党政府による民主的でなく自由のない体制は全般に行きわたっており、大学の管理もそうした体制の一部だったのです。ゆえに、当時の台湾の民主化運動はキャンパスの内外を明確に区別することはできず、我々大学の教師もたとえ強い政治的な傾向があるわけでもなく、政治への参加を強く求めているわけでもないにも関わらず、社会的な抗議運動に多少は関わることとなりました。

7. 1889年9月、帰国後の新学期が始まりました。私は「台湾近代史研究 1895-1945」という授業を開講しました。これは台湾の大学で初めて、日本植民地時代の台湾史に関する授業となりました（それまでは台湾史の授業があったとしてもすべて1895年以前の清朝時代の歴史でした）。台湾大学文学部の一番大きい教室が聴講する学生で一杯になりました。今では台湾政治界の大物となっている人たちも当時はまだ学生でしたから、私の授業を受けた人も少なくありません。しかし当時の台湾はまだ戒厳令下にあり、私の授業のような目下の社会の現実に関わりのある授業はやはりセンシティブなものでした。私としても授業は学術的な内容にすぎないとはいえ政治的なぬれぎぬを着せられる恐れ

もあったため、身を守るために授業は録音していました。その録音テープは今でも取ってあるんです！

8. 1990年3月、台湾では「野百合」学生運動と呼ばれる学生運動が起きました。発端は、台湾の国民大会代表（総統選挙権のある国会議員）が、間もなく行われる総統選挙の機会を利用して政府に対して納得しがたい高額な福利厚生を強要したため、学生の不満が爆発したのです。この学生運動の発起・組織化はすべて学生らによる自主的な行動でした。教師である我々は、学生の求めに応じて授業を屋外（キャンパスや学生運動の現場）でしたり、学生たちが運動に行けるよう休講にするなどしたにすぎません。

9. このように、「野百合」学生運動に参加したのは、私が台湾に戻ってきたばかりのころに教えた学生たちでした。年齢の比較的若い大学生（学部生）もいれば、年上の研究生（大学院生）もおり、彼らが1980年代に培ってきた自由化・民主化のパワーがまさに大噴火したものと言えるでしょう。

10. 「野百合」から24年後に起きた「太陽花[ひまわり]」学生運動（2014年3月）は、国会が中国との貿易協定締結の法案を軽率に可決したことに対する学生たちの不満が引き金となり起きた運動です。この運動は1990年代以降の20余年にわたる台湾の民主化の成果と言えるでしょう。24年前の「野百合」学生運動の後、台湾の民主化・自由化のプロセスは加速しました。1991年には動員戡乱体制[反乱鎮定動員体制]がついに廃止され、1992年には国会議員の全面改選が行われ、1996年には総統民選[直接選挙]が実現しました。さらに2000年にはこれまで50年の長きに渡り台湾の政権を独占していた国民党が敗れ初の政権交代を達成、世界が認める自由・民主の国に変わりました。「野百合」から「太陽花」に至る20余年の十分な時間が、民主的で自由な社会で生まれ育った1990年代以降生まれの民主世代を育んだのです。「太陽花」学生運動の主役はこうした「生まれながらにして」の民主世代（「天然独」と呼ぶ人もいます）なのです。「野百合」学生運動に参加した当時の私の学生たちが、今度は当時の私のように学生たちを見守る教授になっているのです。私たち世代としては「太陽花」学生運動に、古い言葉にある「江山代有才人出[代々傑出した人物が出てくる]」ということを実感したものでした。まさに「世代交代」した、あるいは「松明が代々伝わり、バトンを受け継ぐ者がいる」と感じたのです！

1. 台湾のこの30年来の民主化の流れは、東アジア地域の大きな成功、華人社会の奇跡と見なされています。大きな成功・奇跡と言われるのは、政治的な移行が実現されたという成果に加え、最も重要なこととして非暴力・平和的な方法で達成されたことにあります。民主化の過程において流血や暴力はほとんどありませんでした。

2. 実際、台湾では1920年代以降、日本の植民地主義或いは戦後の蒋介石国民党による軍事独裁に対する抵抗運動はすべて平和的な方法、ひいては「順法闘争」路線を取ってきました。100年に渡る外来政権や独裁専制への抵抗運動のよりどころは高尚な思想などではなく、またその行動も過激なものではありませんでした。台湾人が横暴非道の中にあってよりどころとしたのは、近代になり共有されていた民主・自由・人権という小中学校の教科書にさえ書かれている普遍的価値観でした。台湾の近代政治史を研究している若林正文教授は、台湾人は1920年代以来「(西洋の)近代へのあこがれ」があったと述べています。最近では京都大学の駒込武教授が近代台湾の著名な知識人であった林茂生博士(東大、コロンビア大学)について、彼が生涯追い求めていた夢は真の意味での「台湾人の学校」だったと指摘しています。何とシンプルでささやかな夢でしょうか!台湾人はまさにこのような素朴で単純な思想をよりどころに、平和的ながら頑なにそれを貫いてきたのです。

3. 同様に、我々の世代が担った、自分が生まれ育ち生存している土地や経験(歴史)に対する探求や努力、或いは私の学生たち(「野百合」世代)による普通の社会並の民主・自由への要求、ひいてはさらに次の世代(「太陽花」世代)による、国際的な政治・経済情勢の中で台湾はどう進むべきかという事に対する具体的な主張、これらいずれもがすでに認められている普遍的価値観の表れに過ぎないのです。そして私たちは常に平和的で法に沿った手段を用いてきたのです。

4. よって私は、私の「政治」への参加が学術人としての本分を越えたものだとは思っていません。むしろ、善良なる公民の基本的な義務を果たしたに過ぎないと考えています。

5. 当然ながら、現在の「太陽花」世代が直面している状況は、我々世代の台湾人が直面していた状況と同じではありません。我々の時代は何が誤りなのか、頭の動いている人なら誰が見ても明白であり、本来あるべきもの、つまり立ち上がって勝ち取るべきものが何かははっきりしていました。我々世代の問題はその是非や誤りが分りやすく判断も容易だったのです。しかし、民主的・自由な制度が基本的に出来上がった社会においては、社会の方向性を選択する際に

様々な意見・価値観の対立や選択肢が出てきて、どの意見・価値観が明らかに正しいのか分かりづらくなっています。俗な言い方をすれば、各種の意見・価値観はオピニオンマーケットにおける「商品」にすぎず、どれも一部の顧客にしか受けません。もっとも、私がこう言うのは、私が極端な相対主義者と言いたいのではなく、このオピニオンマーケットを軽々しく捨ててしまっはいけないと考えているにすぎません。

6. ここまでの話を通じて、日本の学生がなぜ政治に無関心なのかということの説明にもなっているかと思います。日本の友人ら（当然ある程度年配です）はよく、台湾と日本の学生を比較して、台湾の若者（学生）は政治に積極的に関心を持っているが日本の若者（学生）は政治に無関心なので心配だと話します。私は、台湾の学生が政治に積極的なのは、台湾の社会・政治に「不義」があまりに多くまた顕著なので、学生の改革への情熱を引き起こしやすいからだと考えています。しかし、もし台湾社会・政治の「不義」がたとえあってもそれほど多くなると顕著でない場合、台湾の学生がそれでも変わらず積極的に政治に関心を持つかどうかについては、私は楽観的すぎる期待はしていません。つまりこうも言えるでしょう。日本は台湾が最近ようやく達成した制度的な民主・自由がとっくに完成されており、民主・自由がすべて獲得されてしまうと「制度」に対しても却って「飽きた」「つかれた」ということになるのではないのでしょうか。

7. 台湾の学生が政治に関心を持つ原因は、努力すれば効果があることを見たからです。台湾はまだ制度建設の途上にありますが、日本は制度がすでに固定化しています。台湾の学生は制度を作ることができる、制度を変えることすら不可能ではありません。一方、日本の学生は固定化した制度がまるでびくともしない鉄の塊のようなので動かしてみようとするまえに「しらけてしまう」のではないのでしょうか。よって、学生に行動する情熱を持ってもらうには、着手が用意で成果が期待できる分野から始めることだと思います。私が留学していた1980年代、多くの日本人が消費者の権利・環境保護・平和ボランティアなどの運動に参加しており、私も励まされ啓発を受けたものです。大文字の政治[Politics 大きな政治的な動き]を変えるのは難しくとも、小文字の政治[politics 個人的な日常の問題]から変えていこうではありませんか！